

佐渡米通信

こめる

2024年 5月号

発行日:2024年5月

発行：佐渡農業協同組合 担当：総務部企画課 駒形(葵)
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

令和6年度生産者大会 -振り返りと今年度の方針-

3月中旬に令和6年度の実産者大会が開催されました。大会は、今後も異常気象を想定したうえで、「新潟県の対策と方針」「液肥穂肥の可能性」「JA佐渡の重点対策方針」そして「佐渡米コンテスト表彰」の組み立てで行われました。

昨年度から掲げた高温登熟対策に有用な葉緑素計(SPAD計)の活用推進の報告では、SPAD計利用者の94%が記録的な猛暑に見舞われた中でも著しい等級低下は見られず、収量も多かったことが分かりました。これはSPAD計の活用により適確な後期栄養確保の判断が出来たためと考えています。

今年度から新たに衛星画像とAIによる省力技術の試験、普及を行います。

大会の最後に、生産者の中から選出される水稻部会長より「1等米比率90%以上の達成」と「特A産地の振り返り」を宣言して一同気合いを入れました。



力強く大会宣言をする水稻部会長

JA佐渡新規就農研修生にインタビュー

JA佐渡では2021年から担い手育成制度を設けています。本制度では研修生がJA職員として3年間働きながら、農業の知識や技術を身に付けることが出来ます。今回は研修2年目の鈴木智重さんにインタビューさせて頂きました。鈴木さんは健康であれば年齢に関係なく働き続けられる農業を職業にしたいと脱サラし就農を目指しています。

鈴木さんが転職しようと考えたのは、実父が亡くなった際に当時小学5年生の息子さんが「僕が農家になるから田んぼをやめないで」と言われたことがきっかけでした。

息子さんは、おじいちゃんと田んぼに行くことが好きだったそうで、田んぼの話になると生前父がどういふふうにしていたのか教えてくれるそうです。現在、息子さんは中学生ですが高校生になったら通学路が変わるので水管理をどうしようかと真剣に考えを巡らせているそうです。

鈴木さんは、息子さんが将来もっとやりたいことを見つけてしまっても目標に向かって進めるように、まずは自身が農業技術の基盤をしっかり習得することに専心し10年後を目途とした投資を計画されているそうです。

JA佐渡では、就農者との密なコミュニケーションを通して、安定した農業経営の基盤づくりが出来るよう年間プランの策定とサポートに努めています。



撮影5日前にぎっくり腰を患った鈴木さんのスマイル



研修先で種まき(右手前)



田んぼが大好きで一緒に田んぼ仕事をする鈴木さんの息子さん



《研修先》
農鳥越さとやま農場



健苗づくり

JA佐渡管内では農薬・化学合成肥料を減らした米づくりをしているため、苗の良し悪しが重要です。



細かい生育管理の中順調に育っている幼苗



育った苗を選び出し田んぼに向かう様子

温湯消毒 春耕耘 苗づくり 田植え 水管理 中干し 穂肥 稲刈り 秋耕耘 ふゆみずたんぼ

